

第21号  
Vol.7-3  
2011年1月1日

# Dari Kuching

## アジア地域福祉と交流の会 (Asia Community Service & Exchange) 広報紙

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-30-9 社会福祉法人嬉泉内

TEL: 03-3426-2323 FAX: 03-3706-7242 HP: <http://www.5f.biglobe.ne.jp/~ace-jps/>

現地事務所: B-B Lorong Bukit Lima Timur 2D, 96000 Sibul, Sarawak, MALAYSIA.

発行人: 中澤 健 編集人: 中澤 和代 TEL&FAX: +60-84-21-7864 E-mail: [kenkn@tm.net.my](mailto:kenkn@tm.net.my)



Muhlipahセンターの池にあそぶ赤トンボ

撮影者 村田 涼子

“いのち”に軽重はない。一度失ったら戻らない。命があるから希望も生まれ、逆転のチャンスも、人生のやり直しだって出来る。命を養うために、人は工夫を重ね努力した結果、さまざまな欲求を満たせるようになった。おいしい食物がいつでも手に入り、栄養もよくなった。医学の進歩もあって日本人の寿命は世界一だという。

だが、命が人間だけのものだと錯覚してはいけない。虫も草も、美しい花も、さまざまな動物たちも

木々も魚も、みんな命の持ち主だ。夜空に輝く星々には一向に見つからない命が地球には溢れている。命を育む水や空気や土、それに太陽の光と熱もある。人の命だけが大事なわけがない。総てがかげがえがなく、お互いを少しずつ与え合い、分け合って共存が成り立っている。単に弱肉強食でない摂理がすごい。

人は身の丈を知り、人だから出来る命の連鎖に加わろう。親は子を選べず、子も親を選べない。私

たちは神様に創られ、小さな弱い“命”を与えられたのだ。小さいから、弱いから、はかなさが潜む。だから助け合い補い合う「絆」が欠かせない。はかなさは神様からの贈り物に違いない。

過剰なほど物と情報に囲まれているが、目を見開けば、誰にも見えないところで力強く生きる“命”がいっぱいある。いとおいしい。心打たれる。感謝の気持ちを忘れずに“いのち”の小さな鼓動に耳をかたむけたい。(健)

## 近藤 龍巳さん 追悼特集一



Tatsuni Kondo Memorial Workshop

近藤龍巳さんは私たちがシブに来て初めて出会った日本人です。短期間でしたが、とても親しく往来した友人でした。4年前にシブを去った彼が、2010年1月8日、44歳の若さで天に召されました。

近藤さんは、素晴らしい足跡をシブ・サラワクに残しました。近藤さんが所属したシブのNGOは彼の死を悲しみ、彼の思い出と業績を残すべく準備が始まり、10月16日(土)彼の名前を冠した工房の開所式がお母様である近藤政子さんと妹さんの重希子さんの臨席を得て挙行されました。シブ市長、JICAのEL所長も出席、お世話になった人たちが友人等200人で会場が埋まりました。

「近藤龍巳記念工房」の玄関脇に飾られている日本語版の文章と日本国総領事から寄せられた追悼文、及び近藤政子さんの感謝の言葉を、ここに掲載させていただきます。

近藤龍巳さんのご冥福を心からお祈りいたします。

### 近藤龍巳記念工房

この工房は、故近藤龍巳氏を記念して彼に捧げられるものであります。彼は謙虚で物静かで高ぶることなく、大きな心で障害を持つ子どもたちに無条件の愛を注ぎました。この工房は、そのことを記憶にとどめるものであります。

近藤龍巳氏は、1965年4月18日、4人兄弟の2番目として神奈川県に生まれました。彼は理学療法士としての教育を受け、12年間その職で研鑽を積んだ後、1996年に途上国で技術協力をするべく青年海外協力隊に加わりました。

1996年に彼はボランティアとしてマレーシアのサラワク州に来ると、初めの2年間は州都クチンで、続いてピンツルに移り、1年活動しました。その技術故、彼は多くの特別のニーズ(障害)を持つ子どもたち、とりわけ脳性麻痺の子どもたちにびったり寄り添うようになっていきました。脳性麻痺の子どもたちは自由に動くことができず、家族の介護に依存して終日家の中で過ごさなければなりません。このどうすることも出来ない子どもたちとその家族が、近藤龍巳氏の心を深く動かし、彼の心に消えることのない思いを刻みました。こうして、彼の天職の種は蒔かれたのでした。

このような子どもたちが少しでもふつうに動けるように、また、人としての尊厳が守られるために何かをしたいと決意した彼は、2000年に日本に帰国します。それから3年間、彼は特別のニーズに応えられる高い技術を習得すべく全てをなげうって修行に専心しました。

技術を習得した龍巳氏は、今度はどの機関の力も借りず、個人の資格で2004年にサラワク州に戻ってきました。それは、サラワクの特別のニーズを持つ子どもたちの助けになりたいという彼の確固とした思いと願いを実現するためでした。それはまた、"Association for Children with Special Needs Sibul"(シブ障害児協会)が設立され、"STAR リ

ソースセンター"がメラ通りにオープンし、障害のある子どもたちにサービスを始め、その情報が地域社会の人々に提供され始めた時でもありました。

龍巳氏と協会とが協力して努力することで、工房を、という考えは現実のものとなりました。資金は限られていましたが、質素で小さな工房が2004年に資料館に設けられ、そこで龍巳氏は障害児のリハビリ器具(座位保持椅子)を個人用に取り替え、それをセンターの障害児たちに使い始めました。それらは特別仕立てで、個別のそれぞれのニーズに合うようにデザインされたものでした。彼の献身と根気強さによって、より使いやすい座位保持椅子が製作されたことで多くの子どもたちが移動できるようになり、生活の質が向上しました。このことで、家の外に出るといってそれまで不可能だったことが可能になり、特別のニーズを持つ子どもたちに新しい世界が開かれたのです。

この現在の工房は2006年6月に開所しました。このことは、短い間でしたが私たちと共にいて、「あなたの深いかわりか、皆の願いがかかっています」ということを教えてくれた人のゆるぎない辛抱強さと本当の献身の証です。

近藤龍巳氏は、2006年12月までサラワクで活動しました。彼は去る時まで、彼が開発した技術で、重い障害児の座位保持椅子の作り方をスタッフに教え続け、その全ての知識と技能を惜しげもなく分け与えました。残念なことに、病に倒れた近藤龍巳氏は2010年1月8日、世を去りました。サラワクへの彼の愛情、愛着は深く強いものでした。彼の最後の望みは彼の遺骨をこの地に返し、シブを流れるラジャン川に蒔いて欲しいというものでした。彼は私たちのもとから去りましたが、彼の魂は生き続け、その優れた業績は引き継がれています。彼の心は永遠に私たちと共にあり、彼の遺骨は雄々しいラジャン川を何時までも流れ続けるのです。

## 近藤 龍巳さん 追悼特集一II

### 近藤さんの業績を讃える

本日、サラワク州シブの地において「近藤龍巳記念工房」の開所式が開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。

この度、近藤龍巳様の喻えようのない功績を知るに及び、胸が締め付けられると共に、一日本人として近藤様の偉業を本当に誇りに思います。理学療法士の教育を受けられたことから、もともと身体的な障害者に対する深い思いやりの心があったのではと拝察いたします。しかし、思いやりの心だけでは何も動きません。近藤様は、日本での12年間の研鑽の後、青年海外協力隊の一員としてサラワク州でご活躍され、帰国後、3年間をかけて障害児のための改良リハビリ器具の作製に携わり、再度、サラワク州に戻られたと伺いました。何か近藤様をそこまで駆り立てたのでしょうか。この地球上に同じ生を受けながら、脳性麻痺などの障害に

より自由を奪われているサラワクの子ども達が少しでも活動の範囲を広げられた時の喜びの顔を見ることが、近藤様に与えられた使命と感じられたのでしょうか。お会いしたことはありませんが、子供の笑顔を優しく見守る近藤様の暖かい眼差しが目に浮かんできます。

今回、近藤様の名前を冠した工房の開所に至りますまでの関係者の皆様のご尽力に深く感謝申し上げます。この工房が日本人とサラワク州民の友好のシンボルとして永く活動され、一人でも多くの方に近藤様の業績を知っていただけるよう祈念します。そして、最後に、天国で見守ってくださっている近藤龍巳様に心より感謝申し上げますと共に、改めてご冥福をお祈り致します。

平成22年10月16日 在コタキナバル日本国総領事  
山口 一義

### 謝 辞

10月の陽光、輝くこのよき日、わが息子の「龍巳」の名を冠した工房が出来上がりました。記念式典にお招き下さり、家族一同心より感謝とお礼を申し上げます。大変有り難うございました。この工房が出来上がるまで、現地マレーシアの皆様のご苦勞は如何ばかりであったのでしょうか。

幼かった日、身体ばかりが大きい割に気の弱い面がありました。4人兄弟姉妹の中でいつも私の傍らから離れず、病院にかかることも多かったのです。徐々に体力がついて友人たちとスポーツをするまでになりました。小学生では少年野球チームで4番バッターに選ばれ、野球大会では、連戦連勝に貢献していたほどです。中学校から高校までは恵まれた体格からバスケットボールに転向し、バスケットボールの練習に明け暮れていました。週末は試合の連続、大きな大会では好成績を取っていたほどです。一年365日、私はドカ弁当作りに奮闘していたことを懐かしく思い出します。高校を卒業してからは理学療法士の道へ進んでいくのですが、理学療法士になってから視野が広がり、海外協力隊員としてマレーシアへ来ることになりました。海外協力隊員の任期を終えて帰国し、帰国してからは日本の病院施設に就職。



病院施設の仕事にあきたらず東京の福祉センターでチームを組んで地域医療活動をしていました。また、学生時代から養護施設のボランティア活動を続けていたことが、小児医療の理学療法士につながって、障害者の座位保持車椅子作成につながるに至りました。この椅子の作成をしているうちに、このサラワクの地で自分の工房をもつことが

夢になり、工房を立ち上げるための技術習得や付随する免許取得は、2000年ころから始めていたようです。仕事の合間をみてはオートバイで日本全国をツーリングをしたり、登山にも精を出していたようです。サラワクの山にも登ったのではないのでしょうか？

志半ばで早世した息子ですが、自分のやりたいことを一杯やったのではないのでしょうか。好きだったサラワクに骨を埋めるつもりでいたようで先ほどラジャン川へ一部散骨を済ませました。

ここが永遠の終の住処となり、きっと息子も本望でしょう。家族ともども安堵しております。この工房により「死して名を残す」ことになったのは、皆様のご支援の賜物と感謝の思いで一杯です。重ねて、本日は有り難うございました。

2010年10月16日

母 近藤 政子

近藤さんの名前の付いた工房に、私のところに来られた日本からの来訪者を案内するのは、今やコースになっています。彼がもう帰って来ないことは分かっていますが、この「工房」に来ると、彼に会えるような気がするのです。本紙6号(2006.1.1)には、彼自身が執筆された記事が載っています。(中澤)

## Social responsibility

中澤 和代

先日、Muhhibahセンターにカスタム(税関局)から大勢(約30人)の訪問があった。多分、1ヶ月程前にサラワク全体に発行されている新聞にMuhhibahセンターの活動が掲載されたことがきっかけになったのではと推測される。そもそも、この報道の動機は、たまたま近くの“UM”という大学の分校の研修を受け容れたことから始まっている。研修者のひとりがMuhhibahセンターの存在を報道関係者に伝えたいらしい。

いつものようにMuhhibahセンターに着いた私たちを待ち受けていた数社の新聞記者にいきなり取材を申し込まれ、問われるままにあれこれ答えたが、それから間もなくの報道であった。この記事は、私たちが、遠くの街に行った時にも、見知らぬ人々から「この間の新聞見たよ!」と言われる程であった。そして、今回、カスタムからの訪問を受けて、市民の間に知られることの利点とか、係わる人々の意識について、様々に考えさせられた。

まず、訪問者であるカスタムの職員たちの態度が、一般の市民として、メンバー一人ひとりを尊重してくれていたことだ。

マレーシアでは、支援という意味が、家族はもとより、関係者にも、まだ、理解されていないように思う。家族や支援者は、障害をもつ人たちを、「自分のことができない人たち」として、世話しすぎたり、本人の行動や考える機会を奪ってしまいがちだ。逆に指示命令等、コントロールすることで彼らの日常を失敗のないようにする場合もある。訪問者への対応も彼らに代わって、支援者が行うのが自然の成り行きらしい。それはメンバーが上手にできないから、という心配や善意からなのであるが…。だから、メンバーが表にでて人間関係を結ぶことが少なくなる。そんなことにある種の違和感

を覚えながらも、文化的背景を考えると、道のりの遠さのため息をつくばかり…。Muhhibahセンターでも、メンバーに対する言葉のかけ方、声の抑揚、ふとした時の態度が私たちの課題となっている。このように感じている時であったからこそ、この日の訪問者たちの感性が一際、新鮮に気持ちの中に入ってきたのである。

カスタムの人たちは、最初にメンバーひとりに、きれいにラッピングされたプレゼントを手渡し、丁寧に握手をしてくれた。もちろん、メンバーは飛び切り嬉しそうだった。多分、スタッフたちも彼らの顔の輝きに気づいたであろう。



プレゼントを受け取るメンバー

次に感激したのは、グループのリーダーが挨拶の中で、「自分たちは今日、こんな機会をいただけてとても嬉しい。私たちは、何らかのサービスを必要とする人たちを支えるのは、社会の責任だと思っている」と表現したこと。それがどうしたの?と読者は思うかも知れない。しかし、考えてもみてください。日本の役所の人たちが、忙しい勤務時間を割いて、福祉施設に訪問するであろうか?私は聞いたことがないし、経験したこともない。わずかに、大手企業がボランティア休暇を奨励しているぐらいである。やはり、障害をもつ人々に対する、国民一人ひとりの意識が大切であるし、このような取り組みを通して、ある意味、福祉が行政依存になるのを防げるのではないだろうか。

たくさんの料理を持ち込んだ訪

問者たちとメンバーと一緒に賑やかな昼食をとったこと。その一つひとつが味わい深いマレーシア料理であったこと。続いて、彼らは、車から運び出したたくさんの植物をMuhhibahの丘に自ら鋤をふって植えてくれたのである。メンバーが日々を楽しめるようにという願いを込めて!

これらの植物が鮮やかな色合いを見せ育つ時、私自身の心にも花が咲き、再びこの幸せを実感できるだろう。数々の真新しい農具はMuhhibahセンターの財産となった。極めつきは、彼らから村落部必需の草刈り機をプレゼントしてもらったことである。その日、空も晴れていたけれど、心も晴れ晴れと交流の時間が流れた。メンバーの中には、クニヤーン(イバン語:お腹がいっぱい!)と腹をさすっている人もいた。ものをもらったからではない。植樹作業をもらったからではない。カスタムという日頃、庶民に厳しい仕事をしている人たちが来てくれたからでもない。どう表現したらいいのだろうか…。日本の福祉現場で働いていた時に感じた何か、こう…、福



植樹をするカスタムの人たち

祉は一部の人のすること、みたいな、寒々とした孤独感とは間逆の役人たちの社会貢献がさりげなく受け取れた嬉しい日であった。

こうしてみると、日常活動の中に、ある程度の公報活動は重要であると認識せざるを得ない。今回は偶然のように起こった事柄であるが、広く社会に活動内容を知ってもらうことにより、障害をもつ人たちの暮らしをより良くするための一翼を担えるかも知れない。ひいてはスタッフ教育にも、というのは欲張りすぎ?

## ACSだより ペナン在住 内海 明美

### Stepping Stone地域支援センターに2名の新メンバー



新しいメンバー

Stepping Stone 地域支援センターには2010年10月1日より2名の新しい女性のメンバーが加わりました。Hui Ying 18歳、Marian 34歳、Hui Yingは、ACSのFirst Stepで早期療育を受け、普通学校の普通学

級で、高校2年まで教育を受けました。親友2名が常に学習の助けをしてくれたといひます。Balik Pulau町の市場でナッツメグなどのピクルス、海老せんべいなどを販売

する両親は、ACSのMVC(当事者会)が会の運営資金のために販売する商品として海老せんべいなどを仕入れ、お世話になっています。週末の土曜日には、マレー語、英語、算数、裁縫を勉強しているようで

す。明るく積極的に作業に取り組んでいます。MarianはBalik Pulauに1箇所ある障害者の通園施設に2-3年通いましたが途中で止め、作業所にくるまで家庭で過ごしていました。母がなくなり、父と兄弟の家庭でただ1人の女性です。作業は熱心に集中しています。時々気にさわることを言われると作業所からはだして駆け出しますが、からっとした性格で人気者となっています。作業所は新メンバーを加え現在数22名、このうち加齢とともにもの忘れが急激に速度を増している人も出てきています。プログラムの検討もしなければなら

新しい年2011年、引き続き、ACS Penangは障害者のチャレンジを支援します。



## RCSはいま 中澤 健

初めまして、サディアさん

10月半ば、「ムヒバ」に新しい仲間が加わりました。サディアさん(写真)、36歳です。彼女は歩くことが出来ません。これまでずっとロングハウスの中だけで暮らしてきました。勿論学校に行ったことはありませんから、文字を読むことも書くことも出来ません。ロングハウスでは、胸で体を引きずるように移動して、トイレに行ったりしていたようです。不明瞭ですが、ある程度の会話は出来ます。Muhhibahでは、早速買った車いすの操作の練習中で、少しずつ移動が可能になってきています。

しばらく前のある日、彼女のお祖母さんが「Muhhibah」に訪ねてきました。自分たちは老いて孫の世話が出来ないのをお願いしたい、と。両親は離婚して母親はその後再婚して別の村に行ってしまう、息子の家族と同居しているが、息

子夫婦にはこれ以上頼めないというのです。兎に角本人に会わなければ、お祖母さんを送りながらロングハウスに行きました。自動車道から入った3キロくらいは未舗装の大変な登り下りの道。雨の日は車は入れません。車が駐められる場所から彼女のところまでの数100m、彼女を背負うしかありません。ウーン、どうしたものか! どうか連れて行って! という本人の熱意…

週1日だけでも始めた通所。マラッカは朝、他のみんなをMuhhibahに降ろしてから男性2人と彼女を迎えに行きます。交代で彼女を背負って車にたどり着きます。Muhhibahでの彼女の幸せそうなこと! 情にほだされて、今では雨の日以外は毎日来ています。彼女の嬉しき満面の顔に誰も敵いませんでした。帰りはみんなと一緒に

にMuhhibahを出ます。

彼女の幸せの笑顔が1日でも長く続くように願わずにいられます。いずれ、彼女のTuai Rumah(家長)と送迎の協力について相談しよう、車いすが上手に操れるようになったら、もう1台買ってロングハウスでも使えるようにしようなどと相談しています。



笑顔で過ごすサディアさん

# 「くらんぱん ぶり かむん」(21回)

こぶしめ

上杉 誠

皆さんは「コブシメ」と聞いて何を想像しますか？

日本人ならこの季節、御節料理に入ってくる「昆布めめ」でしょうか？家によっては入らないところもあるとは思いますが、唯でさえ美味しい新鮮なお刺身を昆布で巻いて、旨味を移して、さらに美味しく食べちゃおう！なんてお正月ならではの贅沢と、職人たちの匠を感じさせる日本食の極みと言っても良い料理です。でも、本来のおせちには入ってこないここ最近の習慣なのです。だって、もともとおせちは保存食の意味合いが強く、生魚の昆布締めなんて昔は入れられませんでしたが、でも、昆布は「よろこぶ」に通じるということで、昆布巻き代わりに入ったりするのですね。

それはさておき、今回ご紹介したいのは、美味しいものは一緒でも、海の中に棲んでいる「コブシ

メ」です。南の海に棲んでいるイカの仲間なのですが、胴体で60cm位までなっちゃう結構大きなイカです。背中には昔、貝の仲間だったころの名残の大きな甲羅があって、コウイカとも呼ばれるイカの仲間です。コウイカは本州あたりでも春先になるとスミイカの名で寿司ネタになったりなんかしますね。身が厚く、お刺身でももちろん美味しいのですが、てんぷらなんかも最高。沖縄ではクブシミと呼ばれていて、クブシミのてんぷらにソースをかけて食べると、ビールにもってこい！もちろんご飯のおかずにも最高です。

サラワクの海では、産卵のころになると浅場に来ては、オスがメスにアピールしている姿を見かけます。くるくると体色を変えては愛のささやきを繰り返します。もともとそんなに多く見られるイカではないので、市場に揚がる機会



おいしいかな？「こぶしめ」

はまれですが、水中で観察していると、眠そうなその瞳と多彩な体色変化について引き込まれてしまいます。

なんだか今回は、お友達紹介って言うよりは、食材の紹介になっちゃいましたね。

あ〜、おなか減った！

Jalan jalan cari kawan はマレー語で友達を探しに行こうの意味です。

## ワークキャンパー募集

日程：3月20日(日)～3月27日(日)

場所：マレーシア・サラワク州・パワン “ムヒバセンター”

費用：4万円(現地集合・解散)

※ 詳細・申し込みは、下記ホームページをご覧ください。

<http://www5f.biglobe.ne.jp/~ace-jps/>

## ACEに入会のお誘い

### \*この会(ACE)は…?

アジア地域福祉と交流の会 (ACE)は、人種、宗教、性別、障害の有無などにとらわれず、「お互いの違いを認めて支え合う」という考えを基本に、アジア地域を視野に活動しているNPO法人です。

具体的な活動としては、主にマレーシアで知的障害児(者)の福祉活動をしているベナンのACSとサラワクのRCSの活動を支援しています。

### \*賛助会員種別と年会費

一般会員 (1万円)	特別会員 (3万円)
学生会員 (5千円)	団体会員 (5万円)
終身会員 (納入1回限り 15万円)	
任意会費会員 (年会費2000円以上)	

### \*ご入会の方法

ホームページ、E-mail、あるいはFaxか郵便で事務局にご連絡ください。アドレス、URL、Fax番号は、1ページ紙名の下にあります。

## 編集後記

・あつという回の1年だった。多くの人に出会い、楽しいこともたくさんあったが、良い別れもあった。自分自身も時に歳を意識することもある。先行きを何となく、不安に感ずるのも歳の瀬の慌ただしさ故であろうか…。が、3日も過ぎれば、楽天主義の本音が気持ち占領する。2011年もみなさんと共に、楽しいことが多くありますように。(Kazuyo)

・格安航空会社“Air Asia”の羽田乗り入れのニュースは、マレーシアでも相当関心を引きました。銀行の窓口の若い女性に、新婚旅行で1月に東京に行くけど、どのくらい楽しい？と。新婚旅行なら暖かいであろうと言うと頬を赤らめていました。皆さんもAir Asiaを試してみませんか。3月にはワークキャンプもあります。良い1年でありますように。(Ken)